

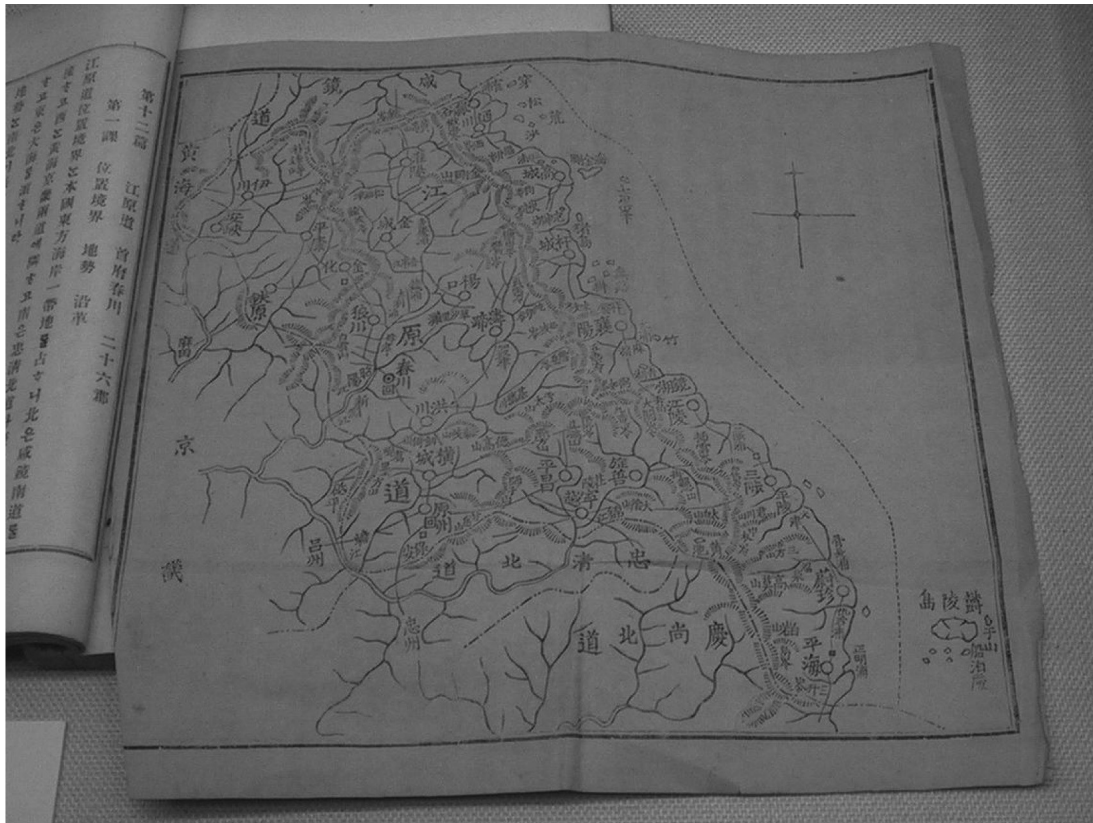


図4-6 『大韓地誌』(1901年)所収の「江原道図」

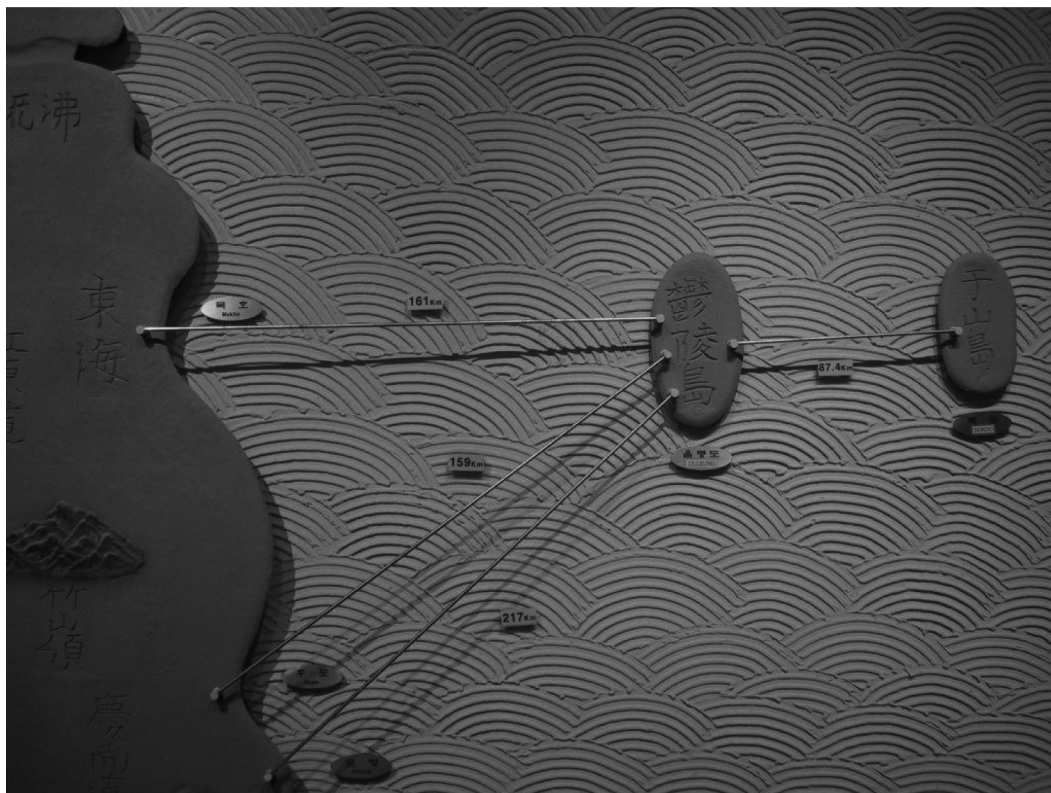


図4-7 第一展示室入口の『八道総図』の展示

1592年の「朝鮮国地理図附図八道総図（写）」は原本は国立公文書館にある。1872年の写本で、文禄の役の際、九鬼嘉隆が朝鮮で写したとされる。八道総図と江原道図に、鬱陵島（東）と于山島（西）が記載されているが、内容は伝統的な朝鮮の八道総図と同様である。

『大韓地誌』、『大韓新地志』、『最新高等大韓新地誌』は20世紀初期に書かれた地誌である。朝鮮全図、江原道図などが収録されているが、いずれも測量図ではなく、朝鮮時代後期の朝鮮図の内容を踏襲したものである。『大韓地誌』（1901年）所収の「江原道図」には、鬱陵島の東側に于山島を描いているものの、その位置は島のすぐ東側にあり、現在の竹嶼であることは明白である【図4-6】。こうした記載は政府の学部編輯局が刊行した「大韓全図」（1899年）、『大韓輿地図』（1900年頃）にもみられる。1900年前後の地理認識は、政府も民間も同じであったことが読み取れる。『大韓新地志』（1907年）の「朝鮮全図」には、于山島は消え、鬱島（鬱陵島）のみの記載となっている。『大韓帝国地図』（1908年）は経緯度も記され、近代地図となっているが、独島の記載はなく、鬱島（鬱陵島）のみ描かれている。つまり1900年以降においても、韓国側では現在の独島は韓国領として認識されていなかった可能性が高いといえる。

なお、第一展示室の入口に、「八道総図」をもとにした地図が展示してあるが、これはすでに指摘されているように（下條、2004）、于山島と鬱陵島の位置が入れ替えられている。現在のところ、「八道総図」で于山島が鬱陵島のはるか東に描かれた絵図は発見されておらず、これは史料の歪曲であるといえる【図4-7】。

③日本・ロシア作製の地図（近代）【表4-6】

政府が発行した地図については、領有権問題を考える上で、重要な資料であるが、すでに第3章で述べたので、ここでは省略する。ロシア製の地図は、1857年ロシア海軍が作製した「朝鮮東海岸図」を1882年に再版したものである。1857年版は日本の海図1876年の「朝鮮東海岸図」のもととなった。当時イギリス、ロシアなど日本海周辺を測量していたが、海図は航行安全のために作製されたものであり、現在の竹島がこの海図に描かれたとしても、朝鮮国の領域にあることを示したものではないことは、先に述

表4-6 独島博物館展示絵図（3）：日本・ロシア作製の地図（近代）

番号	国名	図名	年代	著者	竹島 (アルゴノート島) (存在せず)	松島 (ダジュレー島) (現在鬱陵島)	リアンクール岩 (現在竹島)	備考
1	日本	●朝鮮全図	1875年	陸軍参謀局	○	○	×	アルゴノート島は点線で記す 松島が北にもう1ヶ所描かれる
2	日本	●朝鮮東海岸図	1876年	水路部	○	○	○	
3	日本	大日本分見新図	1878年	山村清助	○	○	×	
4	日本	清国輿地全図	1880年	高田義甫	○	○	×	
5	ロシア	●朝鮮東海岸図	1882年	ロシア海軍	×	○	○	1857年刊行の海図の再版
6	日本	銅板朝鮮国全図	1882年	木村文造	○	○	×	
7	日本	朝鮮国全図	1882年	鈴木敬作	○	○	×	
8	日本	大日本八道支那三国全図	1882年	武田勝次郎	○	○	○	
9	日本	●世界全図	1887年	海軍水路部	×	○	○	島名は記さず
10	日本	地学新編 上（自然全図）	1889年	内田嘉一	○	○	×	
11	日本	分邦詳密大日本地図（大日本国全図）	1892年	杉本七百丸	○	○	×	
12	日本	朝鮮輿地図	1894年	中村鍾美堂	○	○	×	
13	日本	清国新地図	1894年	炭谷博次郎	○	○	×	竹島の位置に鬱島、その東に 竹島が記載：地理的混乱がみられる
14	日本	●朝鮮全岸	1896年	水路部	×	○	○	
15	日本	日本海海戦図	1905年	博文閣	×	○	○	
16	日本	最新旅行用日本全図（朝鮮全図）	1911年	博愛館	×	○	○	
17	日本	●陸地測量部発行地図区域一覧図	1936年	陸地測量部	×	○	○	鬱陵島（松島）とする、竹島は位置が 不正確（鬱陵島の北東に位置） 地形図の一覧、図幅名（鬱陵島、竹島）が 記される、「竹島」は、結局発行されず

凡例 ○：記載あり ×：記載なし、●：政府発行

注：島の位置は経緯度の記載をもとに記した



図4-8 「銅板朝鮮国全図」(木村文造)



図4-9 「朝鮮国全図」(鈴木敬作)

対馬の位置から、竹島はアルゴノート島であることが分かる



図4-10 「実測日清韓軍用精図」(東亜日報より)

べた通りである。

1936年の陸地測量部の「陸地測量部発行地図区域一覧図」も韓国側の研究でよく引用される地図である。5万分の1地形図の一覧図で図幅名と発行年次が記されているが、竹島の図幅名が、本州ではなく、「朝鮮及関東州」のなかに入っているため、島根県編入後も、日本政府は韓国領と認識していたというものである。しかし、国際法では、政府が行政権がどのように及んでいるかが重要であり、当時、竹島は島根県隠岐支庁（1939年以後は五箇村に編入）の管轄下であり、当時の島根県隠岐支庁に竹島関係の行政文書が残っていることから、行政権は、日本政府、島根県の管轄下にあったことは明白である。なお、1944年の「陸地測量部発行地図区域一覧図」（日本国際地図学会『地図』31-4所収）によれば、竹島は1936年と同様、図幅名が記されているものの、発行年次が書かれていない。結局竹島の5万分の1地形図は発行されなかったのである。これは1940年竹島が海軍用地に移管されたことと関係していると考えられる。以上のことから、韓国側の「陸地測量部発行地図区域一覧図」に関する主張は根拠がないことが分かる。

他の地図は、民間が発行した地図である。展示資料のなかで、こうした地図が一番多かった。しかしながら、民間作製の地図は、政府の認識を示しているわけではないので、領有権の証拠とならない。地図の多くには、朝鮮半島の周辺に、竹島、松島が描かれている。韓国側はこのことをもって、日本側が、現在の竹島を朝鮮領として認識したと解釈している。しかし、地図をみると、多くは経緯度が記されており、両島の経緯度をみると、竹島は、アルゴノート島(実在しない島)、松島はダジュレー島、すなわち、現在の鬱陵島にあたることが分かる。例えば、1882年(明治15)「銅板朝鮮国全図」(木村文造)【図4-8】、同年「朝鮮国全図」(鈴木敬作)【図4-9】では、経緯度から、竹島は実在しない島、松島は現在の鬱陵島であることが読み取れる。1882年の「大日本八道支那三国全図」では、竹島、松島、リアンクール岩の3島が描かれている。1894年の「清国新地図」では、鬱島(鬱陵島)、竹島、松島が描かれているものの、竹島の位置は経緯度からアルゴノート島となり、その西側に鬱陵島を描いている。松島は現在

の鬱陵島の位置に書かれている。現在の竹島は書かれていないのである。鬱陵島、竹島、松島の位置について、地理的に混乱している状況が読み取れる。

韓国側がこのような解釈をしている一背景として、韓国側は、明治期も日本側が松島＝独島（竹島）、竹島＝鬱陵島と認識しているとの理解で地図を読み込んでいることが考えられる。実際そういう認識で書かれている文献もみられるが、当時発行された地図のほとんどはそうではなかった。竹島＝アルゴノート島（実在しない島）、松島＝ダジュレー島＝鬱陵島とする地図が明治期になって発行されたのは、当時日本政府が発行した地図、特に海図にそのように記載されていたからである。海図は、主として欧米製の海図、水路誌をもとに作製された。水路部が参考とした欧米製の海図では、竹島をアルゴノート島、松島をダジュレー島とし、さらにリアンクール岩（現在の竹島）を描いていた。1867年のイギリス海軍作製海図「日本・朝鮮図」（島根大学附属図書館所蔵）では、タコ島（竹島）はアルゴノート島とし、すでに点線で書かれている。松島はダジュレー島とし、位置と形状から、これは現在の鬱陵島である。リアンクール岩（現在竹島）には、1849年にフランスにより発見されたこと、イギリスではホーネット島、ロシアではメネライ、オリウツと称すると書かれている。こうした記載は、1857年のロシア製海図「朝鮮東海岸図」をもとに作製された1876年海軍省水路局作製「朝鮮東海岸図」にも踏襲されている。

つまり、この時期の地図に描かれている松島は、現在の竹島ではなく、現在の鬱陵島であることが分かる。竹島とされたアルゴノート島は、1896年（明治29）水路部作製「朝鮮全岸」では消え、それ以後の地図では、松島（現在鬱陵島）とリアンクール岩（現在竹島）のみが記されるようになる。

韓国側のこうした解釈は、最近の新聞報道でもみられる。2006年10月25日付の朝鮮日報、東亜日報によれば、世宗大学保坂教授は、1905年に日本が竹島を編入する前に、日本側が独島を韓国領である地図2点を公開したと報道している。一つは東京府士族鈴木敬作の1882年「朝鮮国全図」、もう1点は吉倉清次郎の1895年「実測日清韓軍用精図」である。「朝鮮国全図」は先に記した通りである。「実測日清韓軍用精図」は松島（独島）の東に国境線が引いてあり、松島（独島）は韓国領であったとしている【図4-10】が、この地図も経緯度から、竹島＝アルゴノート島、松島＝ダジュレー島＝鬱陵島である。つまり、いずれの地図にも現在の竹島は描かれていないのである。

④日本・韓国・連合国作製の地図（第二次大戦後）【表4-7】

1946年の連合国最高司令部が作製した「SCAP: Japan and South Korea」はSCAPIN677号と呼ばれるもので、韓国側はこれをもって韓国領とするが、これは連合国側の最終決定でないと連合国側によって表明されており、これをもって韓国領とする根拠とはならない。

1946年の「内務省地理調査所地図一覧図」にも竹島が含まれていない。これもSCAPIN677号やマッカーサーラインで、竹島に対する日本の行政権が停止されており、この時期に新たな地形図を作製することはできなかった。竹島に対する行政権の停止は最終決定ではないというのは先に述べた通りである。

同じく1946年の「日本新分県地図（島根県）」は民間機関作製の地図であるので、領有権を論ずる史料ではないといえる。

表4-7 独島博物館展示絵図（4）：日本・韓国・連合国作製の地図（第二次大戦後）

番号	国名	図名	年代	著者	鬱陵島	竹島	備考
1	連合国	SCAP: Japan and South Korea	1946年	連合国最高司令部	○	○	SCAPIN677、韓国領とする
2	日本	内務省地理調査所地図一覧図	1946年	内務省地理調査所	×	×	
3	日本	日本新分県地図（島根県）	1946年	日本地図株式会社	×	×	東朝鮮海を表記
4	韓国	中等国土地理附図	1947年	地学社	×	×	

凡例 ○：記載あり ×：記載なし

1947年の「中等国土地理附図」は、朝鮮半島東側の「東朝鮮海」を表記しているが、竹島は書かれていない。

以上の検討から、調査の結果、独島博物館には、日本、韓国の地図史にとって重要な史料が展示されているものの、独島が韓国領であることを示す絵図、地図は1枚も展示されていないことが明らかとなった。

おわりに

従来の竹島研究では、史料の一部のみを解釈して研究される傾向がみられた。地図においても、地図上の于山島や竹島のみ、特にその記載の有無について焦点をあてる傾向がみられる。またある種の先入観やイデオロギーをもとにして研究される例も多々みられた。地図の分野でいえば、特に韓国側の研究において、于山島＝松島という前提で地図を分析している傾向がみられる。その結果、史料解釈上、また地図の分野においても、明らかに間違った解釈が多々みられた。近年竹島問題がクローズアップされてから、こうした史料の間違った解釈が拡大再生産されている。昨春秋大邱大学校での韓国側との意見交換の際にも、韓国側の主張として、「古地図は正確でないので、正確でない地図を現在の価値観で検討しても意味がない。当時の世界地図にも誤りが多数みられる」とした指摘があった。しかしながら、地理学の分野では、歴史的地図を検討する際に、当時の地図は当時の空間認識を反映しているものであり、古地図の分析によって当時の地理的認識が明らかにできるという考え方がすでに欧米をはじめ日本でも確立しているのである。間違った解釈をしないためには、地理学、地図史にかかわる従来の研究をふまえた上で解釈する必要がある。さらには史料の全貌をつかみ、史料にもとづいた解釈が求められる。地図の分野でいえば、地図の悉皆的な調査をふまえ、記載の有無、彩色の有無といった地図の表面的な分析だけでなく、他の絵図との比較、絵図の作成目的、背景についても考察する必要がある。

本稿では、2年間で検討した地図をふまえ、①日本、朝鮮とも17世紀末期には、現在の鬱陵島についてはほぼ正確に把握しており、日本では現在の竹島もほぼ正確に把握していたこと、②日本では鬱陵島渡海禁止後も、江戸時代にわたって両島を認識していたのに対し、朝鮮では現在の竹島は17世紀末期に鬱陵島から確認したにすぎず、朝鮮王朝時代にはほとんど地理的に認識されていなかったこと、③現在の竹島の正確な位置が把握されるのは、西欧によって測量された地図が刊行された19世紀中期以降であったこと、④日本では明治以降、西欧作製の海図を参考にして、現在の竹島の位置、存在を認識していたものの、朝鮮側では20世紀初期まで竹島を認識していなかったこと、などが明らかとなった。しかしながら2年間の調査では、地図の全貌がつかめたわけではない。今後も継続した研究が必要であり、そのためには、竹島問題（鬱陵島も含める）にかかわる史料を、日本・韓国は当然のこと、欧米なども含めた悉皆的な調査をする必要がある。今後も史料の調査・整理・解読・分析の継続が求められ、最終的には研究成果をまとめた竹島にかかわる史料集の刊行が必要であろう。そうした地道な積み重ねによって、ようやく日韓両国が冷静な議論ができると思われる。

【註】

1) わずか1泊2日の滞在で、しかも時間の都合上、陸路での調査はチャーターした車内からの目視しかできなかったため、今後の調査で調査結果が訂正される可能性がある。今後継続した調査が必要である。臥達里は大きな集落ではないが、8443号絵図の「まの嶋」（現在の竹嶼）の位置関係から比定した。なお、臥達里は時間の都合上写真を撮影することができなかった。

- 2) 「たつかはな」は、「辰か鼻」とみられることから、東南東の端ということとなる。道洞付近の岬であると考えられる。
- また、米子市立山陰歴史館所蔵の「竹嶋絵図」(写真版)に、島の北東部に島(まの嶋)が2つ描かれており、8439号絵図にもほぼ同じ位置に島が2つ描かれており、その位置から、一つは竹嶼(韓国名竹島)、もう一つが現在の観音島【写真4-10】であるとみられる。したがって、「竹ノ子嶋」は現在の観音島の可能性がある。詳細は今後の課題としたい。
- 3) 「小谷伊兵衛ニ所持被成候竹嶋絵図之写」(米子市立山陰歴史館所蔵)では、「一、世戸ト御座候得共所究申義ノ様ニハ不奉存候、沖ニ小嶋御座候処都テ世戸ト申候」とあることから、小さな島、岩を指すと考えられる。
- 4) 特に位置の比定には、記載内容が詳しい「竹嶋絵図(写真版)」(米子市立山陰歴史館所蔵)と、享保9年(1724)の「小谷伊兵衛ニ所持被成候竹嶋絵図之写」(米子市立山陰歴史館所蔵)のうち、原図に注記を加えた部分(赤字で記す)を使用した。
- 5) 8439号絵図と同系統の絵図、「竹嶋之図」(鳥取県立博物館所蔵8440号)では「但南風ニハ船繋カレス、灘ヘ居置」、「竹嶋之図」(鳥取県立博物館所蔵8441号)では、「但南風ニハ船懸リ難ク灘ヘ船居置申候」とあり、船を灘へ据え置いたとしている。
- 6) 「竹嶋絵図(写真版)」(米子市立山陰歴史館所蔵)では、「唐船か崎」とある。
- 7) Gerry Bevers 氏のホームページ(ブログ)による。
<http://www.occidentalism.org/?p=377>
- なお、氏のホームページについては、国立国会図書館の塚本孝氏よりご教示頂いた。

【文献】

- 川上健三(1966):『竹島の歴史地理学的研究』、古今書院
- 南波松太郎・室賀信夫・海野一隆(1969):『日本の古地図』、創元社
- 海上保安庁水路部編(1971):『日本水路史1871~1971』、日本水路協会
- 秋岡武次郎編(1971):『日本古地図集成』、鹿島研究所出版会
- 中村 拓監修(1972):『日本古地図大成』、講談社
- 平 重道(1977):『仙台藩の歴史IV 林子平その人と思想』、宝文堂出版
- 塚本 孝(1980):竹島関係旧鳥取藩文書および絵図(下)、レファレンス412号(昭和60年5月号)
- 堀 和生(1987):1905 年日本の竹島領土編入、朝鮮史研究会論文集24号
- 李 燦(1991):『韓国の古地図』(韓文)、汎友社
- 吉田光男監修(1994):『大東輿地図』(復刻、初版1936 年)、草風館
- 岸本 寛(1998):幕末海防論と「境界」意識—「志士」集う「場」を中心に—、『江戸の思想9 空間の表象』、ペリかん社
- 宋 炳基著、内藤浩之訳(1999):朝鮮後期の鬱陵島経営、北東アジア文化研究(鳥取女子短期大学北東アジア文化総合研究所)10号
- 内藤正中(2000):『竹島(鬱陵島)をめぐる日朝関係史』、多賀出版
- 浜田市教育委員会編(2002):『石見学ブックレット3 八右衛門とその時代』、浜田市教育委員会
- 楊 普景(2003):15~17世紀、朝鮮の世界地図と世界認識、21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」15・16・17世紀成立の絵図・地図と世界観ニューズレター第3号
- 楊 普景・渋谷鎮明(2003):日本に所蔵される19世紀朝鮮全図に関する書誌学的研究—『大東輿地図』および関連地図を中心に—、歴史地理学45-4
- 下條正男(2004):『竹島は日韓どちらのものか』、文藝春秋
- 金 学俊著、保坂祐二訳(2004):『独島/竹島韓国の論理』、論創社
- 三好唯義・小野田一幸(2004):『図説日本古地図コレクション』、河出書房新社

- 下條正男（2005）：『「竹島」その歴史と領土問題』、竹島・北方領土返還要求運動島根県民会議
- 朴 炳渉（2005）：竹島＝独島は日本の「固有領土」か？、『飛礫』47号、つぶて書房
- 保坂祐二（2005）：『日本、古地図にも独島はない』（韓文）子音と母音社
- 内藤正中（2006）：島根県竹島報告書に異議あり、郷土石見71号
- 韓国・国立中央博物館編（2006）：『行ってみたい我が領土、独島』（韓文）、韓国・国立中央博物館
- 篠塚富士男（2006）：古地図画像データベースの公開について、筑波大学附属図書館報つくばね31-1